

# 大官大寺南方の調査

—第203・206次

## 1 はじめに

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、大官大寺跡と県道橿原神宮前駅東口停車場飛鳥線（推定山田道）とに挟まれた地域において、条坊施工の状況や当該地の土地利用の様相解明を目的とした地下探査と試掘調査を2017年度より継続的に実施している（『紀要2019』『同2020』）。

ここでは、2019年度に実施した第203次調査について報告するとともに、2020年度実施の第206次調査の概要を示す。第206次調査の詳細は次年度の紀要で報告する予定である（図154）。

第203次の試掘調査地点は、藤原京左京十二条四坊にあたり、大官大寺の中軸線の南延長部および東四坊の推定中軸線の両者をまたぐ東西40m、南北3mの調査区を設定した。調査面積は120m<sup>2</sup>、調査期間は2020年2月3日から3月16日までである。

## 2 検出遺構

**基本層序** 現在の水田面下には、耕作土（厚さ約15cm）、いわゆる床土（厚さ約15cm）があり、以下、褐色土（厚さ約15cm）、暗褐色土（厚さ約30cm）、黄褐色土（厚さ5~20cm）、灰褐色粘質土～砂（地山）と続く。ただし、Y=-16,740以西では地山は確認できず、湿地状の堆積層が広がる。遺構検出は、まず褐色土上面（標高92.65m）でおこない、さらに下層の暗褐色土・黄褐色土上面（標高92.50~92.65m）でもおこなった。

主な検出遺構は、調査区西寄りの褐色土上面で南北溝1条、暗褐色土・黄褐色土上面で南北溝2条、東西溝1条とそれに並行する柱穴である（図155）。

**南北溝SD4580** 調査区西端で確認した主軸がほぼ正方位にあう南北溝。幅は北側で1.3m、南壁では2.8mと広がる。深さ0.3mで、埋土は大きく2層にわかれるが、いずれも暗灰黄褐色粘質土で、人為的に埋められたと考えられる。埋土から鎌倉時代の土師器が出土した。

**南北溝SD4582** 調査区東端で確認した南北溝。主軸は北でやや東に振れる。幅0.9m、深さ0.2mである。埋土からは土器片が少量出土したが、時期は不明。



図154 第203・206次調査区位置図 1:3000

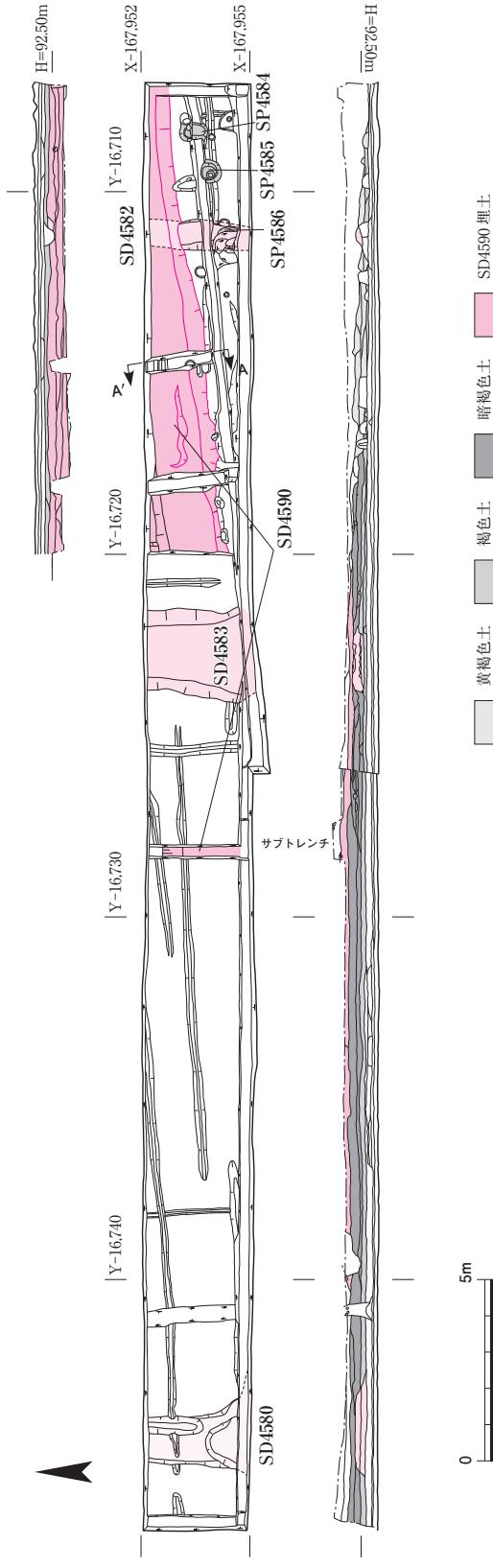


図155 第203次調査区遺構図・土層図 1:200



図156 SD4583 (北から)

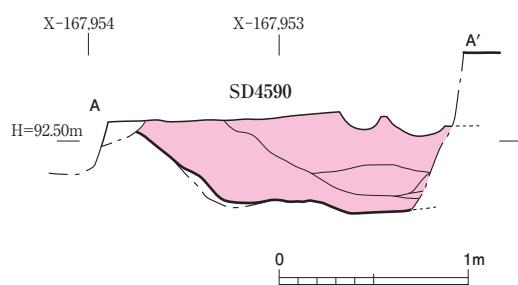


図157 SD4590断面図 1:40

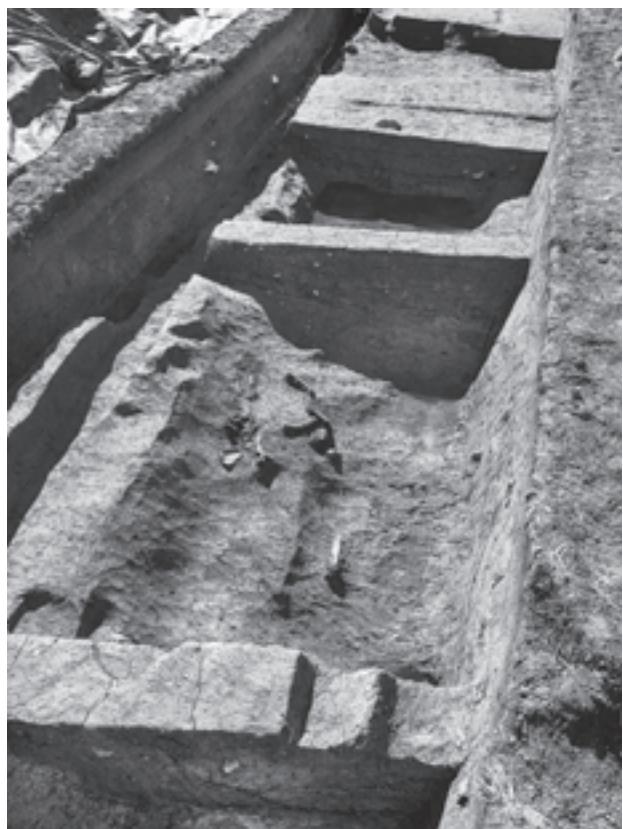


図158 SD4590 (北東から)

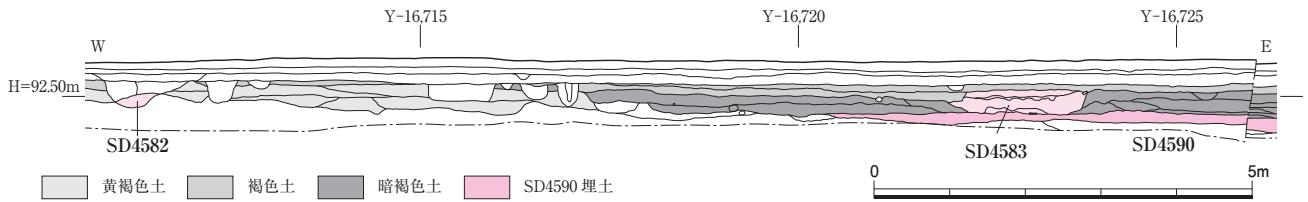


図159 調査区東半部南壁土層図 1:100

**南北溝SD4583**　調査区の中央で確認した南北溝。主軸は北でわずかに東に振れる。幅2.2~2.6mで、深さ0.3mである。溝底には砂が堆積し、埋土中位にもラミナが確認でき、流水と堆積を繰り返した可能性がある。埋土から飛鳥I~IIに位置づけられる土器が出土した(図156)。

**東西溝SD4590**　調査区の北東から南西に向かって斜行する東西溝(図157・158)。幅2.2m以上、深さ0.5mで溝底の形状は平坦。溝の南肩を調査区東端から13m分検出した。この部分の北肩は調査区外北に延びる。埋土はいずれも暗黄褐色粘質土で3層にわかれ、人為的に埋め立てられたとみられる。溝底にも水成の堆積土は確認できなかった。埋土からは飛鳥Iに位置づけられる土師器・須恵器、刀形、燃えさしなどの木製品、モモ核などの植物遺存体がまとまって出土した。なお、調査区西半部では、褐色土を掘り下げておらず、平面で東西溝を検出し



図160 第203次調査区全景(東から)

ていない。しかし、Y=-16,728付近の南北断割、および南壁の土層断面から、SD4590はY=-16,741付近までは調査区内にあるが、それ以西は南の調査区外へ逸れていくものと推測できる。

**柱穴SP4584~4586**　SD4590の南肩に沿って並ぶ3基の柱穴(東からSP4584、SP4585、SP4586)。もっとも残りのよいSP4585で直径0.7m、深さ0.4mを測る。SP4585では柱穴底で柱のあたり状の凹みを確認した。柱間間隔は約1.2m(4尺)、約1.8m(6尺)と一定しない。屏や柵列の可能性がある。

(山本 崇・片山健太郎／総社市)

### 3 出土遺物

**瓦磚類**　本調査区からは丸瓦5点(0.3kg)、平瓦20点(1.5kg)が出土した。焼成、胎土からいざれも古代のものとみられるが、小片のため詳細な時期は不明である。

(石田由紀子)

**土 器**　整理木箱10箱分の土器が出土しており、その大半は古代の土師器・須恵器である。ここでは飛鳥時代の土器がまとまって出土した東西溝SD4590の資料につき報告する(図161)。

土師器(1~25)には杯C、杯G、杯H、椀、高杯C、高杯G、甕などがあり、須恵器(26~40)には杯H、杯H蓋、杯G、杯G蓋、高杯、平瓶、壺、甕などがある。杯C(1~7)は、破片資料も含め、深手の個体が多い。図化した資料の底部外面はいずれもケズリ調整で、2~6は口縁部外面にヘラミガキを施す。3は口径11.8cmに復元したが、口縁部は8分の1ほどしか残存していない。4は口縁部残存率約40%で、口径は11.8cm、径高指数は37.3。6は全体の2分の1ほどが残る。口縁部には歪みがあり、口径は16.4~18.2cmで、径高指数は36.3~40.2。底部内面中央には、5条の平行する直線状の暗文が入る。杯H(8~9)は、破片資料を含めても、杯C・杯Gに比べ出土量が少ない。10~13は杯G。10・13は、口縁端部に浅い凹みを有した内傾面をつくる。14は椀。精良な胎

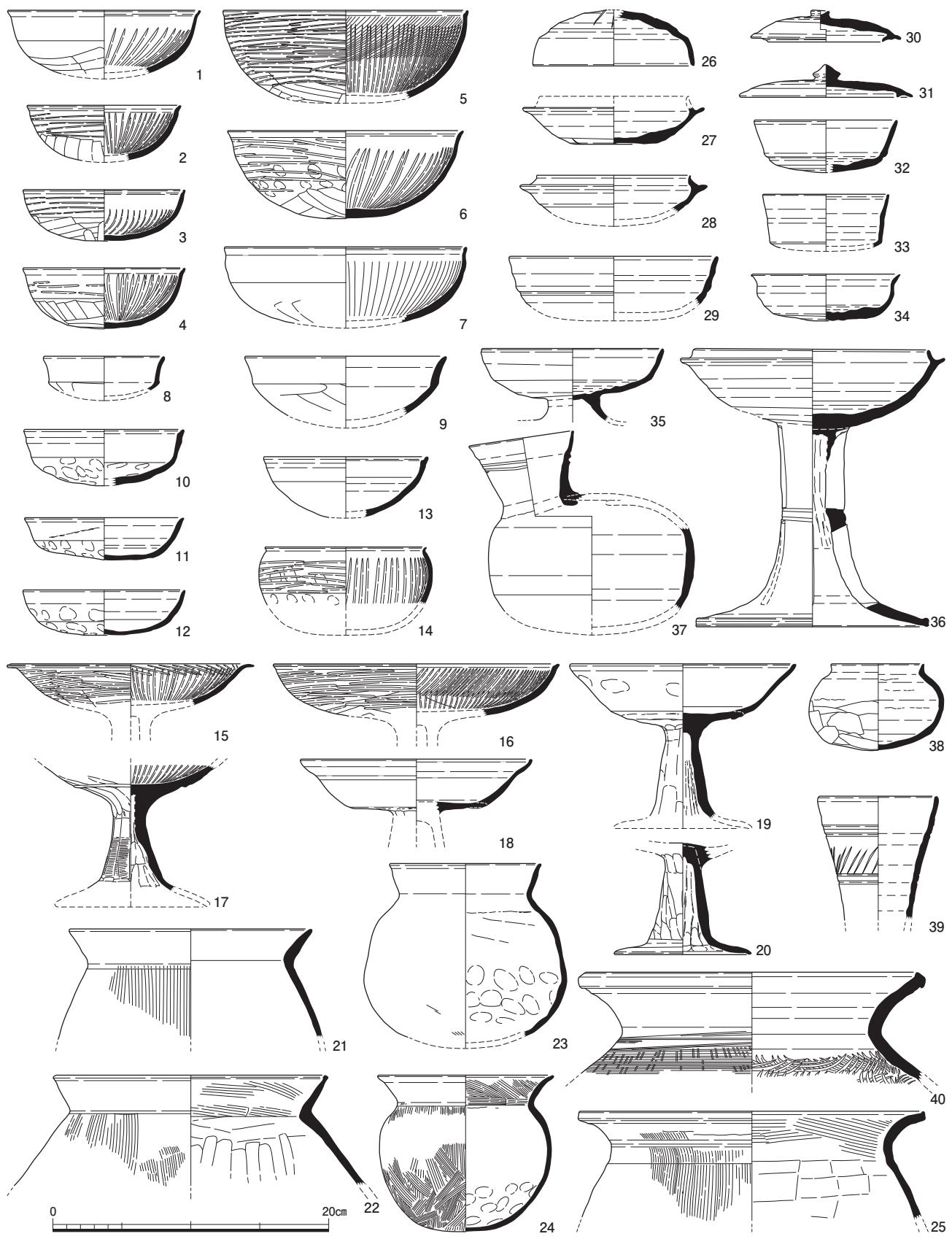


図161 東西溝SD4590 出土土器 1:4

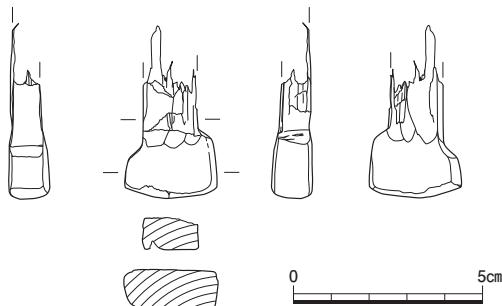


図162 SD4590出土刀形木製品 1:2

土で、口縁部外面にヘラミガキを施す。高杯C（15~17）は、杯部内面に放射暗文を施し、口縁部外面はヘラミガキで仕上げる。胎土は杯Cと同じく精良である。高杯G（18~20）は、杯Gと同じく胎土が粗く、砂粒を多く含む。21~25は甕。小型品（23・24）・中型品（21・22）・大型品（25）の大きく3つに分けられる。

杯H蓋（26）は、口縁部残存率14%で、口径は11.8cmに復元した。頂部外面をロクロケズリで調整し、ヘラ記号を有す。27・28は杯H。27は口縁部を欠損するが、受部外端径は13cmほどに復元できる。底部外面はロクロケズリで調整し、＊のヘラ記号が入る。28は底部を大きく欠く。口縁部残存率は25%弱で、復元口径は11.0cm、受部外端径は13.6cmである。30・31は杯G蓋。30はほぼ完形で、口縁部外端径は10.9cm。頂部外面のほぼ全面に自然釉が降着する。31は全体の2分の1ほどが残り、口縁部外端径は12.6cm。宝珠形のつまみをもち、外面は赤みがかった灰色を呈す。29は杯。脚がつき、高杯となる可能性もある。口縁部残存率15%で、口径を15.2cmに復元した。外面の体部と底部の境には、凹線が1条巡る。32・33は杯G。32は口縁部残存率50%で、口縁部外端径は10.4cm。底部外面には丁寧なロクロケズリを施す。33は口縁部残存率13%。外面には薄緑色の自然釉がかぶる。杯（34）は口縁部の一部を欠くが、他はほぼ完存。口縁端部が外側に屈曲する器形で、底部外面はヘラ切り不調整。35・36は高杯。35の杯部は80%ほどが残る。杯部内面のほぼ全面に漆が付着し、パレットとして使用されたと考えられる。36は三方二段の透孔をもつ。口縁部残存率は40%で、口径は16.9cm、受部外端径は19.2cm。灰白色を呈し、杯部の底部外面はロクロケズリで調整する。平瓶（37）は、口縁部外面に二条の凹線が巡る。口縁部内外面および体部外面の広範囲に自然釉が降着する。短頸壺（38）は口縁端部をわずかに欠くのみで、ほ

ぼ完存する。焼成が甘く、灰白色を呈する。底部外面を不定方向のヘラケズリで調整する。

これらの土器群は飛鳥Iに属す。土師器杯Cの径高指數や暗文、外面調整、須恵器杯H・杯Gの口径や外面調整を勘案すると、飛鳥編年の基準資料のうち、川原寺下層SD02・SD367下層出土土器や山田寺下層整地土・SD619出土土器の様相にもっとも近い。  
(若杉智宏)

**木製品** 東西溝SD4590埋土から、木製品1点、コンテナ1箱分の燃えさしや割裂材が出土した。1は刀形の把頭部である（図162）。刃部側と背側の両側から削り込みを入れて、把頭をつくりだすが、全体形は不明である。残存長は4.6cm、樹種はヒノキである。

**その他** 東西溝SD4590埋土から、轍羽口の破片が数点出土した。  
(片山)

#### 4 第203次試掘調査のまとめ

**東四坊坊間路の有無** 本調査の目的の1つは、大官大寺南方における条坊道路の確認であった。調査区内では、南北方向の溝を3条確認している。このうち、SD4582とSD4583を両側溝とした場合、調査区内での道路心はY = -16,716.9となる。香具山の北側で確認されている東三坊大路と東四坊大路の推定道路心を本調査区まで延長し、その中点の座標値を計算した場合、Y = -16,720.7となり、推定位置から3.8m東へずれる。加えて、SD4583からは飛鳥I～IIの土器が出土しており、藤原京の道路側溝であるとは速断できない。また、もう1つの南北溝SD4580は、鎌倉時代の土師器が出土したこと、対になる側溝が確認できない点に問題が残る。香具山以南における条坊道路の有無の判断は今後の調査に委ねる部分が大きい。

**飛鳥時代の溝の確認** 本調査では、飛鳥Iの土器を含む東西溝SD4590を確認した。溝の性格や調査区南方の延長がどうなるかは不明であるが、調査区周辺は東から西に向けて低くなる地形で、Y = -16,740から西では、下層に湿地状堆積があり、SD4590はこれに注ぐ可能性も考えられる。出土遺物には漆付着土器がわずかにみられ、また轍の羽口片もあることから何らかの生産活動があったことがうかがわれる。このように、調査区周辺に飛鳥時代の遺構が展開することは確実で、今後の調査による性格解明が望まれる。  
(山本・片山)

## 5 第203次地下探査の成果

**探査の概要** 大官大寺南方地区については、2017年度より継続的に地中レーダー探査(Ground Penetrating Radar: 以下GPR)による調査を試掘調査と並行して進めている。本年度は予定地内の内、第199次探査地の南側にあたる範囲を中心に探査を実施した。面積は約11,000m<sup>2</sup>、調査期間は2020年1月31日および2月3日である。調査前に降水が続き、予定範囲の内の南側の広い範囲に水溜りが残っていたため、この部分に加え、すでに耕作が開始されている部分については範囲から外し、北区と西南区の2地区に分け、約3,700m<sup>2</sup>を対象に探査を実施した。

使用機材は前年度同様、マルチチャンネルGPRであるStreamX(IDS社)を用いた。この機器は並列に配された複数のアンテナによる同時計測が可能であり、迅速かつ高密度での地中データの取得が可能である。使用したアンテナの中心周波数は200MHz、アンテナ間の計測間隔は0.12mである。データ取得ソフトウェアはOnevisionを用い、解析にはGPR-SliceV7.0(Geophysical Archaeometry Laboratory)を使用しておこなった。位置情報はRTK-GPSを用いて取得した。使用機器はGPS1200(Leica geosystems社)である。

探査対象地は極めて軟弱で水はけの悪い箇所が多く、降水および厳寒期のため地表面に水が浮いて探査が困難である範囲以外においても部分的な水分の集中があり、これに成果が大きく影響している。このため、探査条件は良好ではない。



図163 第203次地下探査調査区位置図 1:2500

取得データは各チャンネル毎に地表面の高さ調整をおこない、解析を実施した。地表に表出している水などによる影響をBandpass Filterにて極力除去し、Background Filterにて走査時のノイズを除去した後、Time-Slice図を作成した。

**北区の成果** 北区では、深さ18ns(地表下約55cm)よりも深い部分のX=575071m(Y=-16,754)付近およびX=575096m(Y=-16,729)付近において南北方向のやや反射の強い部分が存在する(図165)。ただし、形状は不整形であり、明瞭に連続するとは言い難い。

それ以外では小型の点状の反射がみられるが、この性格はあきらかではない。

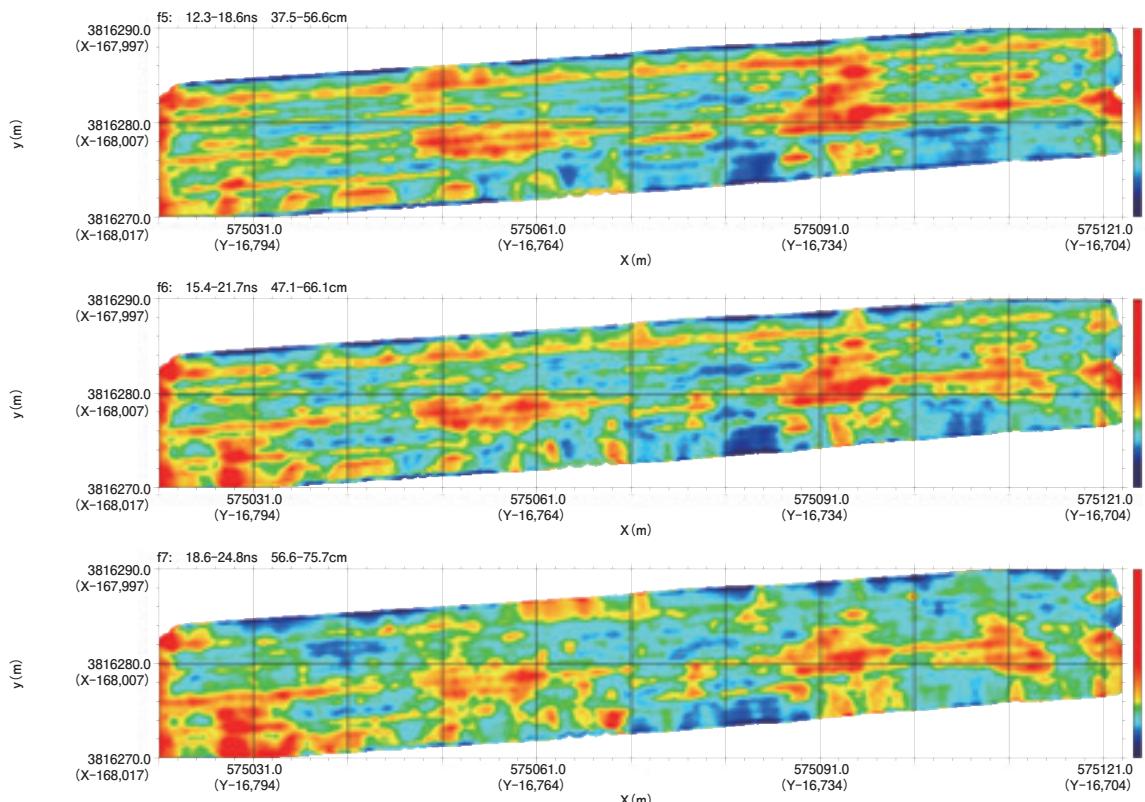
**西南区の成果** 西南区については地表直下よりY=3816236m(X=-168,051)付近および3816218m(X=-168,069)付近に東西方向の反射が連続する(図166)。これらは走査方向に直交することもあり、何らかの地中の変化を捉えていると考えたい。また、X=575033m(Y=-16,793)付近のY=3816181m(X=-168,106)からY=3816236m(X=-168,051)付近に等間隔の点状の反射が存在しており、これらについても検討が必要と考える。ただし、いずれも地表の浅い部分よりみられるものであることから、その性格については発掘調査などを通じて慎重に検討が必要と考える。

**まとめ** 大官大寺南方地区を対象に継続的に地中レーダー探査を実施した。しかし、条件などの問題もあり、有効性を確認できたとは言い難い。今後、手法の洗練や調査成果との検討をすすめ、当該地域における探査手法を確立する必要がある。

(金田明大)

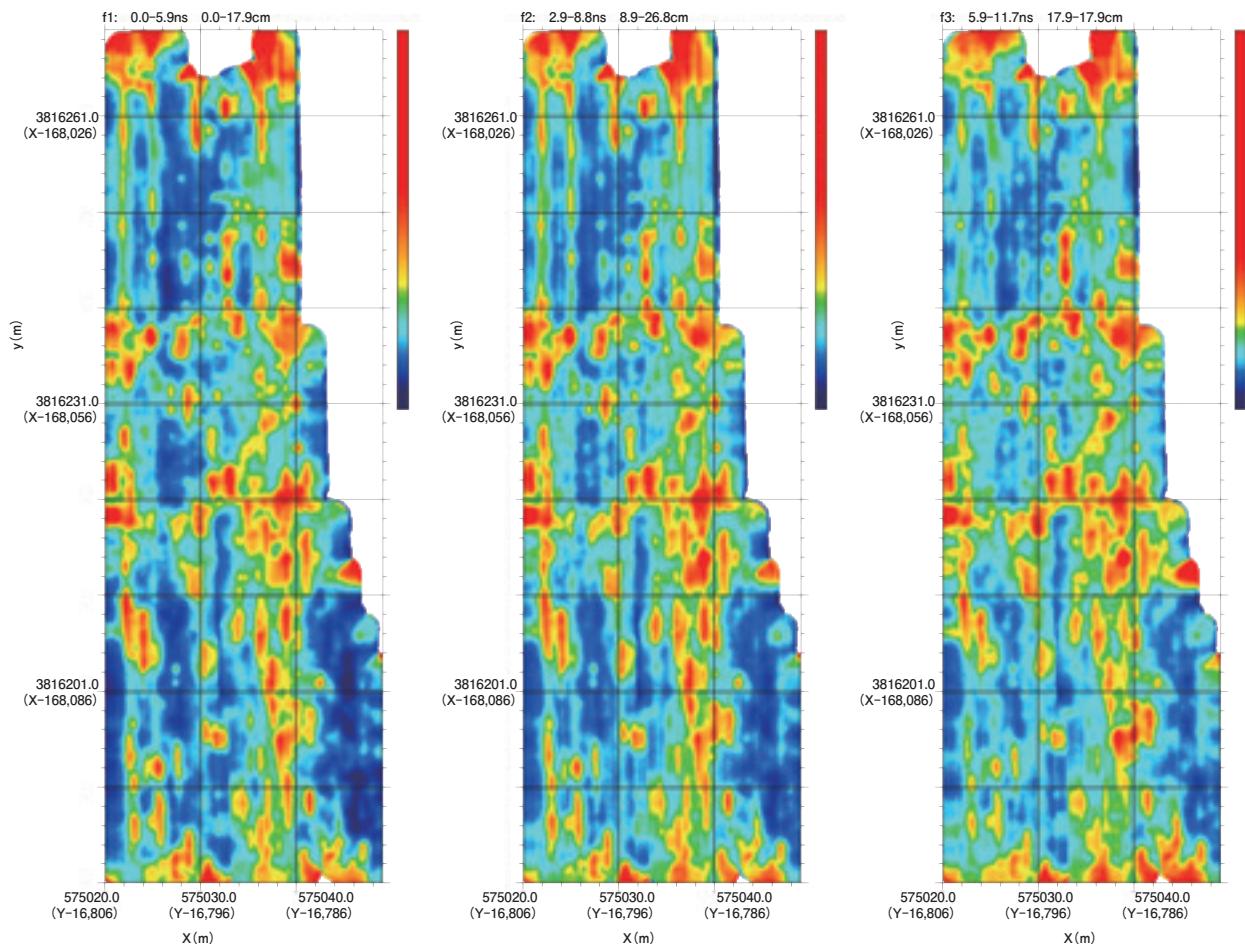


図164 第203次調査における地下探査の様子(南東から)



※UTM座標から平面直角座標系第VI系への変換は下記のWEBサイトによる。( )内は変換後の目安。  
<http://asp.ncm-git.co.jp/QuickConvert/UTM2BL.aspx>    <http://asp.ncm-git.co.jp/QuickConvert/BL2TM.aspx>

図165 第203次北区GPR成果 1:800



※UTM座標から平面直角座標系第VI系への変換は下記のWEBサイトによる。( )内は変換後の目安。  
<http://asp.ncm-git.co.jp/QuickConvert/UTM2BL.aspx>    <http://asp.ncm-git.co.jp/QuickConvert/BL2TM.aspx>

図166 第203次西南区GPR成果 1:800

## 第206次調査の概要

2020年度は、第203次調査の南方において試掘調査および地下探査を実施した。以下に調査の概要を述べるが、詳細については次年度の紀要であらためて報告する予定である。

**試掘調査** 調査地は藤原京左京十二条四坊に位置する。東四坊坊間路の推定位置を横断するかたちで、東西40m、南北5mの調査区を設定した。調査面積は200m<sup>2</sup>、調査期間は2021年1月13日から2月25日までである。

基本層序は、上層から耕作土、いわゆる床土、上層整地土（灰褐色土）、中層整地土（暗褐色土および黒褐色粘質土）、下層整地土（黄橙褐色シルト）、滯水環境に由来する自然堆積土（粗砂）である。しかし、調査区の東西で土層の堆積状況は著しく異なっている。調査区東端では自然堆積土が床土直下にみられ、西に向かって徐々に傾斜する。調査区東部では、自然堆積土の直上に下層整地土（黄橙褐色シルト）が西側に傾斜して堆積し、このため、西に行くにつれて中層整地土が厚く施される。一方、調査区西部では、最下層には基盤層とみられる暗橙褐色砂質土が厚く堆積し、直上に中層整地土（暗褐色土）のみが施される。調査区中央部では、最下層にやや厚い中層整地土（暗褐色土および黒褐色粘質土）がみられ、この部分においてのみ上層整地土が存在する。遺構の検出は、調査区西部と中央部では暗褐色土上面、また、調査区東部では黄橙褐色シルト上面で実施した。

主な検出遺構は、総柱建物1棟、南北棟建物1棟、南北堀2条、井戸1基、土坑2基である（図167）。土坑はいずれも時期不詳であるが、それ以外の遺構は7世紀後半～末に位置づけられる。総柱建物は調査区西端部に位置し、東西3間分（約4.2m）、南北2間分（約2.8m）を検出した。検出した柱穴のうち3基には柱根が遺存していた。調査区西部南辺では、南北棟建物の北妻部分と考えられる柱穴3基の北半部分を検出した。調査区西部の北壁際には、井戸の底部南辺（幅約1.6m）がかかる。埋土からは土師器杯Cが出土した。なお、井戸の南側には、小振りの柱穴が東西に2基並ぶ。調査区東部では、約7mの間隔を空けて2本の南北堀が並行する。上記のほか、調査区西部では暗褐色土直下に黒褐色土が局地的に広がり、ここから小型丸底土器2点や布留型甕の小片な

ど古墳時代前期の土師器が少量出土した。

今回の調査により、調査地周辺がかつて湿地帯であり、7世紀になって本格的な整備がおこなわれた可能性があきらかになった。総柱建物をはじめとする建物群が建てられ、藤原京期にかけて土地利用が活発化した様子がうかがえる。他方で、今回の調査区内では、東四坊坊間路の東西側溝に相当する南北溝を検出していない。

**地下探査** 本年度は、第203次調査時における探査実施地の南側の区画、約10,000m<sup>2</sup>を対象として、地中レーダー（GPR）を用いた探査をおこなう計画であった。しかし、水はけの悪さなど諸々の制約から、当初予定した区画の一部に対してのみ探査を実施した。あわせて、第203次調査における未探査部分の一部に対しても追加で探査を行った。結果、今回探査を実施した総面積は約5,400m<sup>2</sup>である。探査の実施日は、2021年2月8・9日の2日間であった。

（山藤正敏）



図167 第206次調査区全景（西から）